

神奈川県立博物館発掘調査報告書

梶山遺跡(1)

A REPORT ON THE ARCHAEOLOGICAL EXCAVATIONS
BY KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM

KAJIYAMA

1

神奈川県立博物館
KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM
Naka-ku Yokohama, Japan
March 1968

目 次

1 遺 跡	1
2 調査の概要	2
3 I 区の遺構と遺物	
(1) 表土および暗褐色土層	5
(2) 1号住居址	5
(3) 2号住居址	8
(4) 溝状遺構 I	10
(5) 溝状遺構 II	11
4 II 区の遺構と遺物	
(1) 表土および暗褐色土層	13
(2) 2号住居址	13
(3) 7号住居址	14
5 III 区の遺構と遺物	
(1) 表土および暗褐色土層	15
(2) 4号住居址	15
(3) 5号住居址	18
(4) 6号住居址	20
(5) 土 壇	21
6 結 び	21

図 版 目 次

図版 1. 遺跡遠景 / 発掘遺構の一部
図版 2. 1号・3号住居址 / 3号住居址土器出土状態
図版 3. 4号住居址 / 4号住居址土器出土状態
図版 4. 5号住居址 / 埋甕炉および使用土器
図版 5. 溝状遺構 I 発掘部分 / 遺構断面 / 発掘前の状態
図版 6. 溝状遺構 II 発掘部分 / 土壇
図版 7. 各区出土石器
図版 8. 各区出土土錘
図版 9. 5号住居址出土蛇頭把手
図版 10. 1号住居址出土土器
図版 11. 4号住居址出土土器

梶山遺跡第1次調査について

梶山遺跡は鶴見川流域にのこされた遺跡のひとつで、その存在は以前から知られており、遺跡の一部にある小貝塚から出土した土器は、一部で梶山式土器と呼ばれている。

しかしながら、本遺跡については未だ組織的な調査研究は行なわれておらず、わずかに二三の小規模な発掘が試みられてはいるものの、調査結果が発表されていないため、詳細は不明であった。

ところが、最近になって横浜市の実発展にともない、梶山遺跡の付近一帯は急速に宅地化され多くの遺跡が壊滅あるいは調査不可能な状態となり、本遺跡もまた遠からず同様な運命をたどることが予想されるに至ったのである。このような状況が進めば、今後地域的な調査研究に支障を来す恐れがあり、とくに時期、性格その他が不明な本遺跡については、早急に記録と資料の収集をはかる必要が生じた。

そこで、神奈川県立博物館では考古部門の事業として、地域研究と資料収集を兼ね、昭和42年度から43年度にかけて3回の予定で発掘調査を実施することになり、第1次調査を昭和42年8月20日から同月29日まで延10日間を費して行なった。その結果、本遺跡は縄文時代から古墳時代に及ぶ集落址を主体とする遺跡であることを確認するとともに、多数の資料を得ることができ、また二三の遺構については注目すべき所見があった。

調査結果の概要は以下の各項に述べるとおりであるが、本報告書においては事実の記載に重点をおき、種々の問題に対する検討は調査終了後に、神奈川県立博物館研究報告で扱う予定である。

調査主催者・神奈川県立博物館長 村田良策

発掘担当者・神奈川県立博物館学芸員 神沢勇一

調査参加者・寺田恵子、川口徳治朗、梅川紀子、渡辺レイコ、長田平、
広田花代子(神奈川県立博物館学芸部)
市川勇、安達新、小野正敏、川崎和夫、奥山陸義、
高橋芳宏、大久保優、村山昇、清水茂、内田俊秀、
磯部久生、竹之内康夫(明治大学)
湯川悦夫(教育大学)
石井和博、千田務(県立鎌倉高校)

調査期日・昭和42年8月20日～29日

報告執筆者・神沢勇一

1. 遺 跡

梶山遺跡は、東京湾に注ぐ鶴見川とその支流矢上川の合流点から東南約1,2kmの地点にあって、行政区劃は神奈川県横浜市鶴見区上末吉町に属し、一般に梶山と呼ばれる低平な台地上に占地している。

梶山は鶴見川の下流右岸にひろがる海蝕台地の一部をなすもので、寺尾方面から北に延びる台地の一端が、鶴見川に向って西南方から半島状に突出した部分にあたる。すなわち、この半島状の突出部は長さ約1km、中程が両側から刻まれたちいさな谷によってくびれ、細い尾根でつながってはいるが、ほぼ南北に2分されたような形になっており、その北半部（先端側）が梶山の台地である。

地形図にみられるように、台地の東南側と西北側には東北方に開口する大きな谷があり、側面の所々にちいさな支谷が入り込んでいる。東南側の斜面には、上面から約10m下に、幅の狭い段丘面がみられる。また、台地の先端は、ふたつに分岐して鶴見川に接している。

標高は、南方の台地にある三角点から換算して、約40mをはかり、谷の平坦面との比高は約20mである。

遺跡の規模はかなり大きく、梶山台地の南寄り3分の1を占め、台地上面と東南側の段丘面およびその下の緩斜面に及んでいる。現状は大部分が畑地で、約8000㎡の範囲に、土器片その他の遺物の散布が認められる。時代的には縄文・弥生・古墳の3時代にまたがる遺跡であるが、地点によって遺物の時期が幾分異なっており、台地上の平坦面では弥生時代後期および古墳時代前半期の遺物が多い。また、段丘面とその下の緩斜面においては、縄文時代および弥生時代の遺物も少量認められるが、古墳時代でも鬼高期以後のものが大部分を占めている。

台地上には、東南縁辺の付近に直径10m前後の小円墳が2基存在する。構造、出土品等については不明であるが、後期古墳とみてよいであろう。

東南斜面には、縄文時代前期の小貝塚（梶山貝塚）が残されており、かつて一部が小発掘されたとき、花積下層式土器が出土したと伝えられているが、詳細は不明である。

また、梶山を劃す支谷に面した南斜面においては、段丘面とほぼ同じレベルに末期の横穴墳墓群が存在する。横穴墳墓は、このほか東南斜面の貝塚付近にも開口していたと言われるが、確認することができなかった。

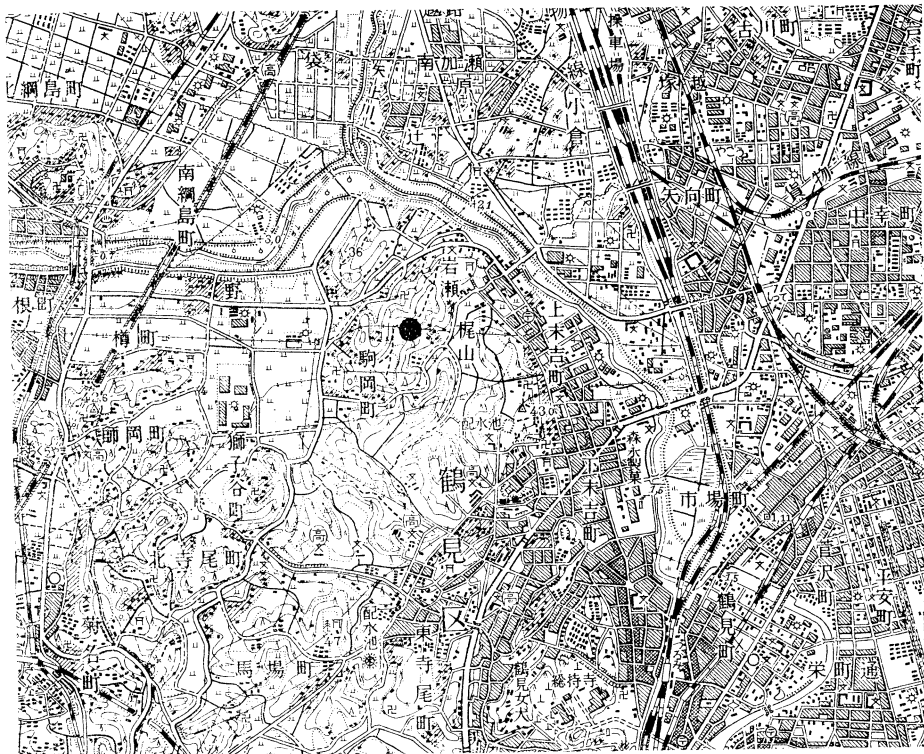
2. 調査の概要

前に述べたように、梶山遺跡の規模はかなり大きく、全面的な調査はほとんど不可能であるので、最も早く宅地化される可能性がたつよく、かつ未だ性質の解明されていない梶山貝塚が存在する台地南部を重点的に調査することにし、南端の縁辺部に発掘区を設定した。

その地点は、台地中央を縦走する市道の東側で、道路沿いに並んだ住宅群の裏手にあたり、地番は横浜市鶴見区上末吉町梶山405番地に属する。発掘区付近の地形は、ほぼ平坦であるが、わずかに南に傾斜しており、西南側は梶山台地を劃す「くびれ」を形成する支谷に面し、東南側は、その支谷から分岐した、ちいさい谷に面している（第2図）。

発掘区の規模は $44\text{ m} \times 18\text{ m}$ で、 $2\text{ m} \times 2\text{ m}$ の単位で、A1からH22まで176に区分し、そのうち第3図に太い線で示した範囲を発掘した。発掘面積は延286㎡である。

発掘区については、予備調査のさいボーリングを試みたのであるが、数箇所に着込みが認められただけで、遺構の存在を確実に知ることができなかった。そこで、発掘区を縦断する形で、E1・2、5・6、9・10、13・14、17・18および21を試掘し、その結果、E1・2を除き、後



第1図 梶山遺跡付近地形図

50000分の1

述する第3層の黄褐色土層中に、有機物を含む暗褐色土の落込が6箇所発見された。

当初の計画では、B列およびH列にも試掘を行ない、全般の状態を把握する予定であったが、たまたま颶風の影響による降雨のため作業が大幅に遅延し、一方、耕作の都合で日程の延長が不可能であること等により、計画を変更して落込の認められる部分を中心に、逐次発掘区を拡大することにした。

これにともない、新にE3・4, 7・8, 11・12, 15・16および22と、或る程度発掘区の状態を把握することを兼ねて、A3~G3, A13~H13およびA21~H21を発掘し、一方落込部分の遺構の確認と露出につとめた。なお、調査の進行にしたがって、発掘区を3分し、I区(A-H~8-13), II区(A-H~14-22)およびIII区(A-H-1-7)とした。

各区の層序は第1層=表土(耕作土)、第2層=有機物を含む暗褐色土層、第3層=ローム質の黄褐色土層、第4層=関東ローム層となっており、部分によって多少厚さが異なる点を除いて、ほぼ様な堆積状態を示している。このうち、第2層の暗褐色土層は、色調、粒状性等において、表土と差がなく、土層自体としては同一のものと考えられる。また、遺構の部分においては、この暗褐色土が覆土となっているが、固さが異なり、色調にも僅かながら差が認められるため、遺構との関係をも考慮に入れ、暗褐色土として区別した。なお、E18・19に現れた遺構と思われる落込には、暗褐色土ではなく、多量の有機物を含む黒色土がつまっているのが注意された。第3層の黄褐色土は、粒状性において、関東ローム層上端の軟質部と酷似しており、両者の境界を明確に指摘するのは困難である。けれども、この層には少量ではあるが遺物が包含されており、或る程度までは色調によって識別することができる。

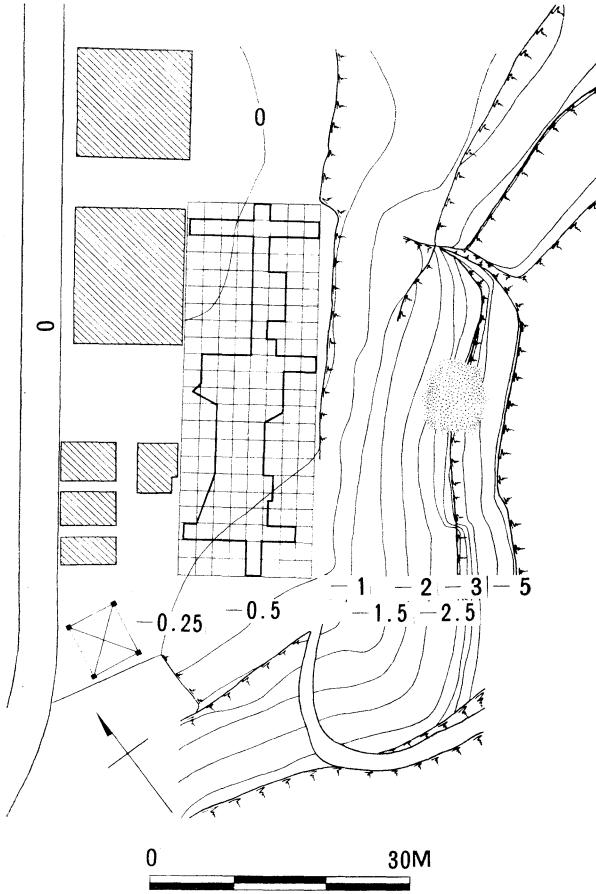
遺物は表土、暗褐色土層、暗褐色土(遺構覆土)、黄褐色土層および住居址床面から出土したが、暗褐色土層と暗褐色土中に最も多い。総量はリンゴ箱6個を満たす程度で、土器破片が大部分を占め、型式としては、花積下層、諸磯a, 諸磯b, 阿玉台, 勝坂, 加曾利E I, 加曾利E II, 加曾利E III, 称名寺, 堀の内 I, 宮の台, 久ヶ原, 弥生町, 前野町および五領の諸型式が挙げられる。これらの型式は発掘区全体にみられたが、型式によっては、地点により粗密を示すものもある。なお、これについては他の遺物とともに、3項以下で説明することにした。

今回の調査で確認した遺構は、堅穴住居址8, 溝状遺構2, 土壇1で、そのうち、堅穴住居址4, 土壇1の発掘を終了した。発掘未了の遺構は第3次調査で継続の予定である。

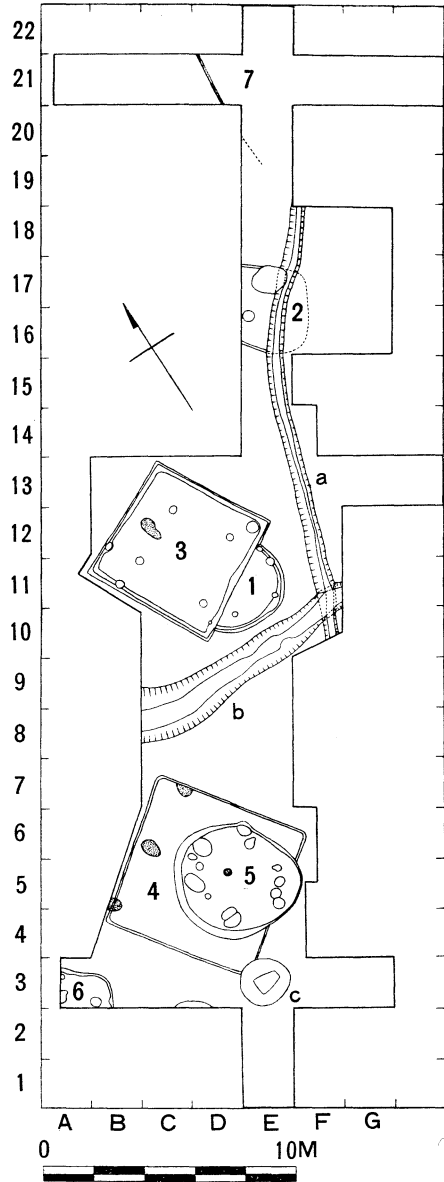
各遺構の時期は次のとおりである。

堅穴住居址1号住居址(I区) 弥生町期 3号住居址により約2分1の損壊。

2号住居址(II区) 宮の台期(未了) 溝状遺構Iが床面の一部を切る。



第2图 发掘地点地形图



第3图 发掘区平面图

- 1. 1号住居址 2. 3号住居址 3. 2号住居址
- 4. 4号住居址 5. 5号住居址 6. 6号住居址
- 7. 7号住居址 a. 沟状遗构 I b. 沟状遗构 II
- c. 土墩

- 3号住居址（Ⅰ区）五領期 1号住居址と重複。
 4号住居址（Ⅲ区）五領期 5号住居址および土壙と重複。
 5号住居址（Ⅲ区）勝坂期
 6号住居址（Ⅲ区）加曾利期EⅠ期
 7号住居址（Ⅱ区）五領期（未了）北側壁面が一部残存。規模不明。
 8号住居址（Ⅰ区）加曾利EⅡ期

溝状遺構 Ⅰ（Ⅰ～Ⅱ区）宮の台期（未了）溝状遺構Ⅱを切る。

Ⅱ（Ⅰ区）宮の台期（未了）8号住居址床面を切る。

土 壙 （Ⅲ区）時期不明 4号住居址と重複，先後関係不明。

3. Ⅰ区の遺構と遺物

（1）表土および暗褐色土層

表土の厚さは20cm前後で、遺構の部分では多少落込んで30～40cmの堆積をみる。暗褐色土層は20～30cmの堆積を示しているが、F13～H13においては、台地の縁辺に向って次第に厚さを増し、末端では厚さ60cmに達している。また、遺構のある部分では、表土同様に幾分落込んだ状態を示し、20cm前後厚さを増している。

Ⅰ区においては、表土および暗褐色土層中には、遺構の存在は認められなかった。

遺物の出土は本区が最も多かったが、G13とH13だけは僅かに土器片数個が出土したにすぎなかった。表土と暗褐色土層では、後者からの出土が多いことを除けば、遺物に差はない。

遺物の大部分は土器破片で、花積下層、諸磯a、諸磯b、勝坂、阿玉台、加曾利EⅠ、加曾利EⅡ、加曾利EⅢ、称名寺、堀ノ内Ⅰ、宮の台、久ヶ原、弥生町および五領の諸型式が認められる。そのうち、花積下層式土器はF10～13に、加曾利EⅠ式土器と加曾利EⅢ式土器は溝状遺構Ⅱの西半部に、称名寺式土器は3号住居址北半部の暗褐色土層中に比較的多い。

石器は表土中から打製石斧1、暗褐色土層中から打製石斧3、石鏃2、磨石1、剝片石器1が出土した。

土製品としては、土器破片に加工した土錘11がある。いずれも暗褐色土層出土で、加曾利EⅠ式土器またはⅡ式土器の破片と思われる。

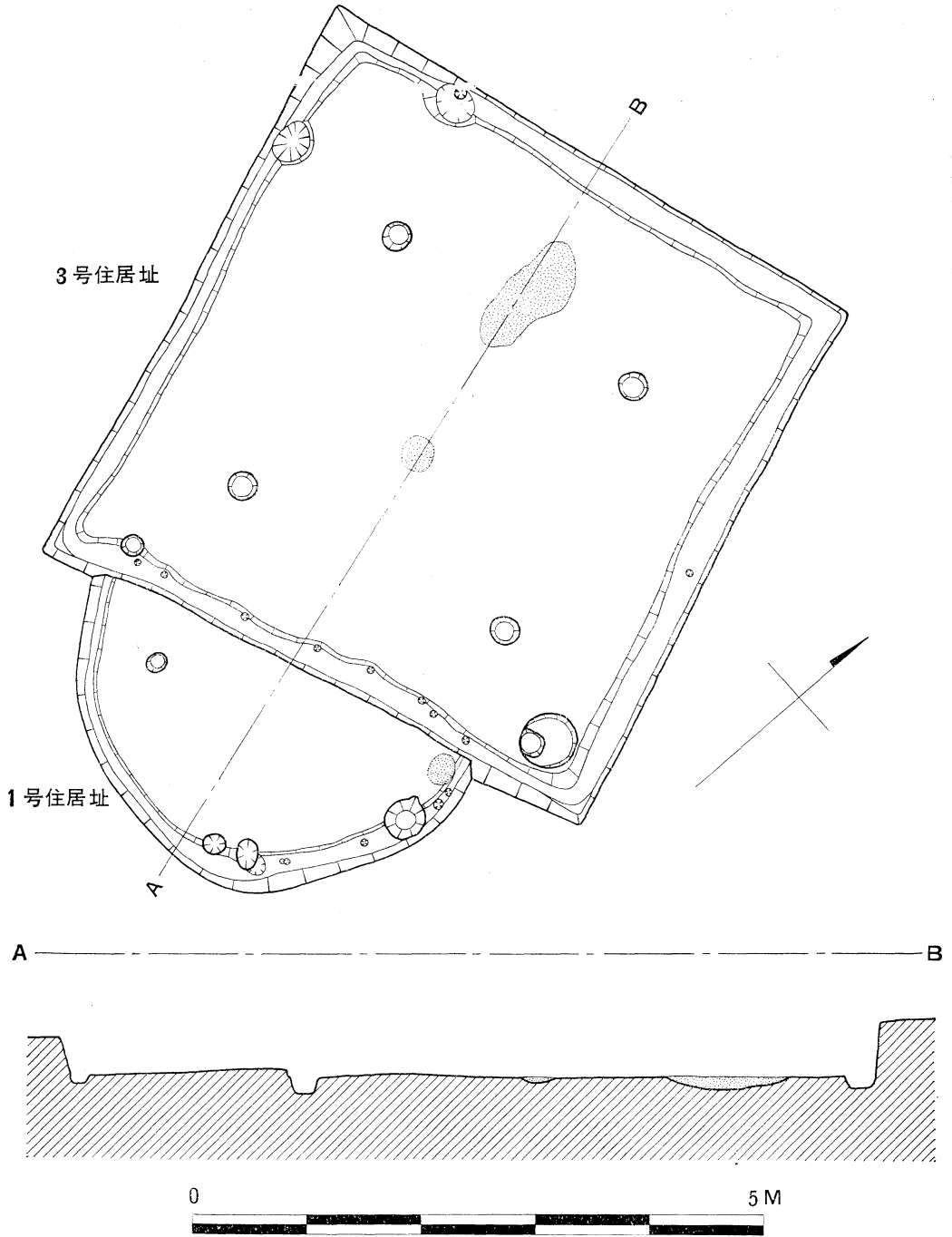
（2）1号住居址

住居址（第5図，図版2）

円形にちかいプランをもっていたものと思われるが、3号住居址によって約2分の1が破壊



第4图 E1~E22西壁断面图



第5图 1号・3号住居址实测图

され、残存部分は半円形を呈している。東南側が多少張り出しており、後に述べる周溝や柱穴の状態からみて、この部分に入口があったと想定される。

床面は関東ローム層を掘込んで作られ、地表からの深さは70cmである。床面は固く踏み固められている。床面東隅の部分においては、22cm×28cmの範囲に、厚さ3cmの焼土が存在したが、床面は焼けておらず、炉址とは明らかに異なっており、何等かの理由で灰と焼土を掻き寄せたものと考えられる。

壁の高さは40cmで、内側に幅10cm前後、深さ15cm前後の周溝がめぐっているが、周溝は東側の張り出しの部分においては、幅20cm前後、深さ5cm前後となり、明瞭さを欠いている。柱穴は床面西隅の近くに1個、東南隅の周溝に接する部分に2個、東側の周溝中に1個存在する。なお、東南隅の周溝中には、柱穴に接して、直径6cm前後の小穴が5個みられる。

本住居址の柱穴は、床面の1個を除き、その位置と柱穴付近の周溝の形状および柱穴に付随するように設けられている小穴の配置等から、入口の構造に関係するものと考えられる。

床面の遺物（第6図1～4，図版2，図版10）

床面からは第6図に示した4個体の土器が出土した。出土状態はまちまちで、浅鉢形土器は西側壁付近、壺形土器上半部破片は南隅、壺形土器の再生品と台付鉢形土器は相接して東側の焼土付近に存在した。

1は壺形土器の破片で、口縁にめぐらした粘土帯に篋で刻目を加え、縄文帯を除いて器面を円彩している。2は破損した壺形土器の下半部を再生したもので、器面に丹彩の痕跡を止める。割れ口を研磨して整形し、煮沸に使用したらしく、器面に煤の付着が認められる。3は完形の浅鉢形土器で、器面を入念に研磨している。4は台付鉢形土器で、台を欠く以外は、ほぼ完形である。これらの土器は、器形および文様の特徴によって、弥生町式土器に比定することができる。

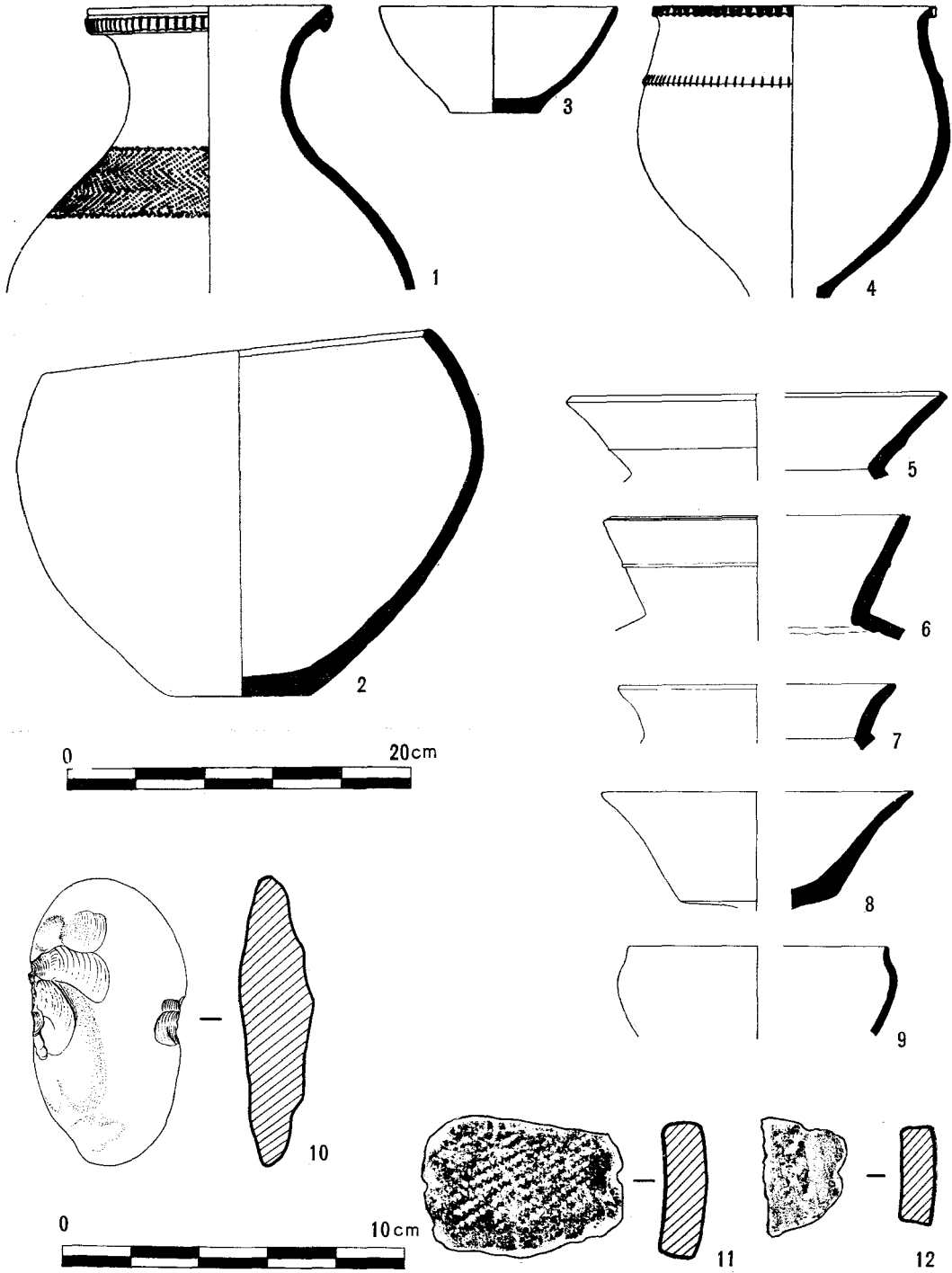
覆土中の遺物

1号住居址に関係すると思われる遺物は認められず、花積下層式、加曾利EⅡ式、その他の土器破片が少量存在したにすぎない。

(3) 3号住居址

住居址（第5図，図版2）

プランは5.2m×5.2mの方形で、床面は地表下75cmにあり、1号住居址よりも約10cm低い。



第6图 1号·3号住居址出土遗物实测图

壁は高さ約 50 cm で、壁に沿って幅 15～20 cm、深さ 10 cm 前後の周溝がめぐる。1号住居址と重複したため、南側の壁は弱く、識別し難い。この部分では、周溝中に直径 10 cm 前後の穴がほぼ等間隔に並んでおり、壁面の補強が行われたことが知られる。ほぼ同じ大きさの穴が西隅および南隅の周溝中に計 3 個みられるが、それらの性質は不明である。

柱穴は 4 個で、ほぼ対象の位置にあり、直径 25 cm 前後、深さは 50～60 cm である。床の中央と北側の壁に近い部分に、30 cm × 28 cm、110 cm × 50 cm の規模で炉の焼土が存在した。

床面の遺物

甕形土器の口縁部その他の破片が数個、床面に密着して出土した。頸部が鋭い「く」字形を呈し、口縁部が僅かに屈曲して広がり、外側の器面に細い稜をもつものが特徴的で、五領式土器の新しい部分に比定することができる。

覆土中の遺物（第 6 図 5～12）

上半部からは、暗褐色土層中にみられた各型式の土器破片が少量出土したが、下半部、とくに床面直上には五領式土器が多く、甕形、壺形、盤形、高坏形、器台形等の器形が認められた。本住居址の覆土は、一部分床面付近まで達する攪乱を受けており、そのさい床面の土器が多少遊離して覆土中に混じたような形跡がある。

なお、覆土中からは、別に石錘 1 個（10）と土器破片を利用した土錘 2 個（11・12）が出土した。

（4）溝状遺構 I

遺構（第 7 図、図版 5）

いわゆる V 字溝に含められるもので、I 区から II 区にかけて、東北—西南方向に延び、F 10・11 において溝状遺構 II を、II 区において 2 号住居址を切っている。

遺構は幅 50～70 cm、深さ 50 cm 前後で、黄褐色土層と関東ローム層を掘込み、地表面から底までの深さは約 80 cm である。今回の調査では、全体の規模を明らかにするに至らなかったが、本遺構においては、きわめて注目すべき所見があった。

すなわち、本遺構は一般の V 字溝とは異なって、断面は下端が丸味をもった「レ」字形を呈し、直径 6 cm 前後の穴が底部に 20 個、斜面に 9 個あり、ほかに、それよりやや大きな浅い穴が 3 個みられる。穴の方向は、底部の穴は垂直に、斜面の穴は約 45° の角度で斜めに掘られている。穴の配列は一定していないが、それらの存在から柵のような施設が伴っていたものと考えられる。

構築時期については、直接確かめることは不可能であるけれども、宮の台期に属する2号住居址を切っているので、宮の台期またはそれ以後であることは明らかである。本遺構の底部直上の覆土中からは宮の台式土器の破片がごく小数ではあるが、ほぼ単純にちかい状態で出土しており、またV字溝そのものも宮の台期に顕著な存在を示すところから、その時期は宮の台期（または直後）あたりに考えてよいように思われる。

覆土中の遺物（第8図）

遺物の量は少ない。覆土上部からは花積下層式、加曾利EⅡ式、加曾利EⅢ式および弥生町式土器の破片約30個が混在しており、底にちかい部分から宮の台式土器の破片6個が出土した程度である。

（5）溝状遺構Ⅱ

遺構（第7図，図版6上）

断面がV字形を呈し、いわゆるV字溝として一般的なものである。全形を明らかにするに至らなかったが、走向はほぼ東西に延び、F10・11において溝状遺構Ⅰに切られているので、これに先行することが知られる。また、発掘部分の西端にちかいC8・9においては、8号住居址を切っている。この住居址の床面は、遺構上端から62cmの位置にあり、南側斜面には炉址の一部が露出している。

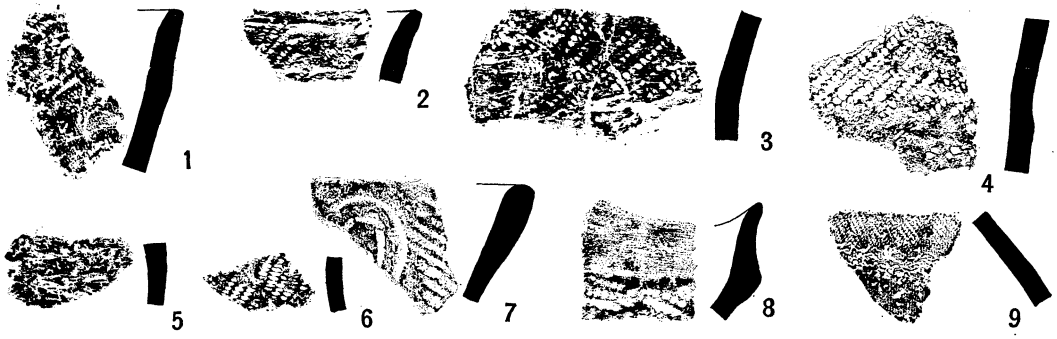
本遺構は黄褐色土層と関東ローム層を掘込んでおり、幅50～90cm、深さは平均60cmで、底部に幅30～40cmの平坦な面がある。なお、本遺構には溝状遺構Ⅰにみられたような小穴は認められなかった。

覆土中の遺物（第9図）

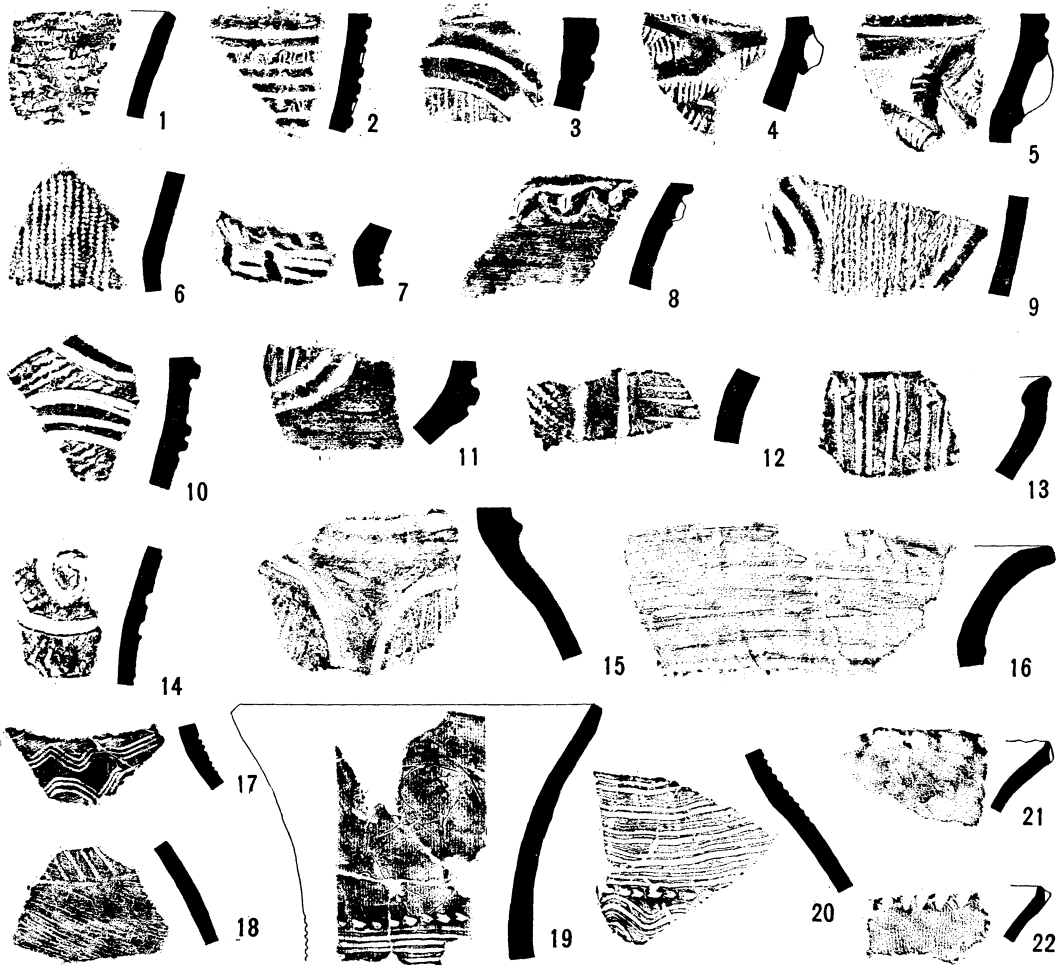
覆土中からは、土器破片その他の遺物が比較的多く出土したが、8号住居址を切っている西端部に加曾利EⅡ式またはⅠ式と思われる破片が多いことを除けば、特別な出土状態はみられなかった。

土器型式には、勝坂式、阿玉台式、加曾利EⅠ式、加曾利EⅡ式、加曾利EⅢ式、宮の台式および弥生町式の諸型式が認められ、ほかに縄文時代前期および後期に属すると思われる破片が少量出土した。

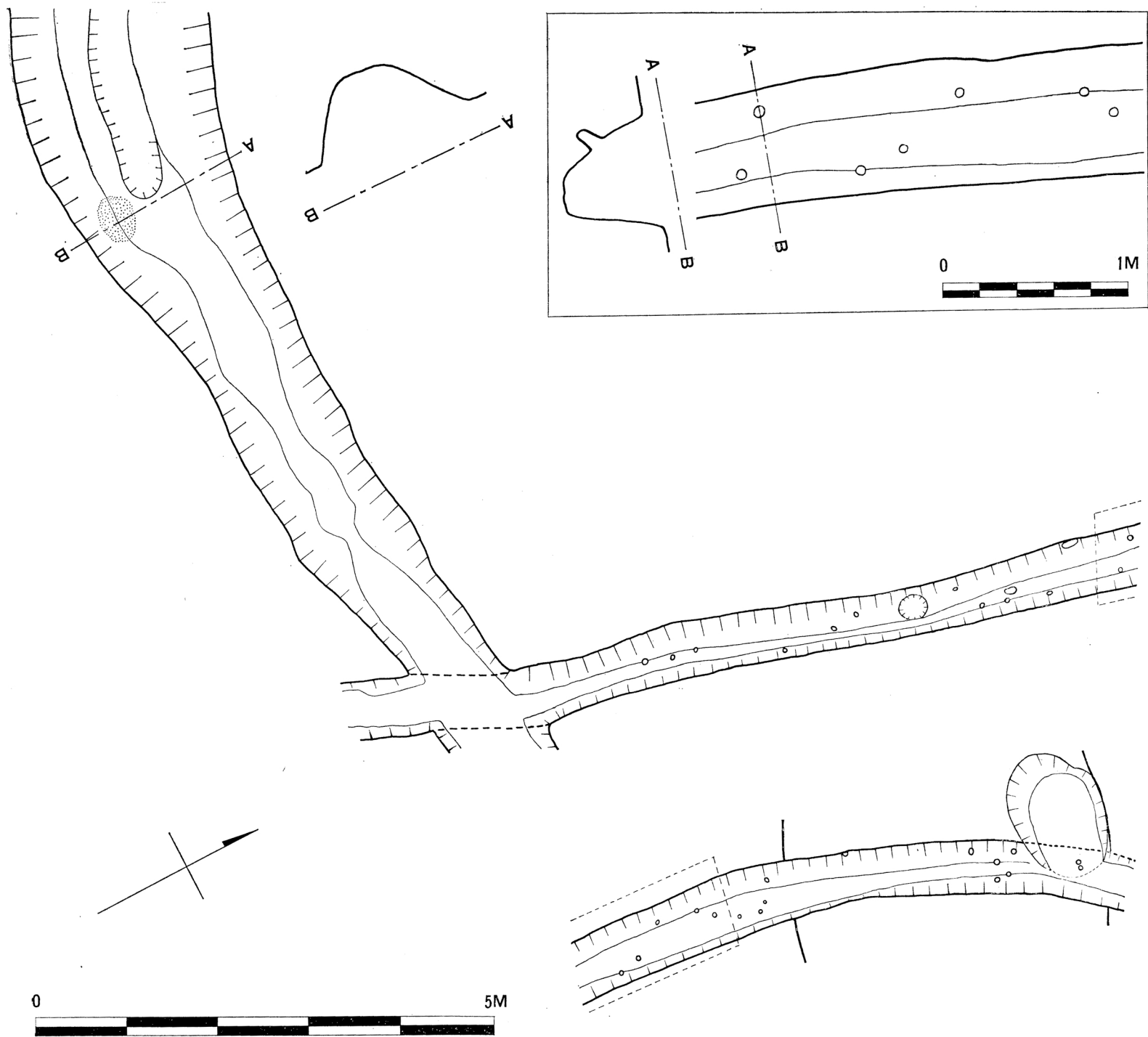
その他の遺物としては打製石斧3、剥片石器1、土錘1が出土した。



第8図 溝状遺構 I 出土土器 (約1/3)



第9図 溝状遺構 II 出土土器 (約1/3)



第7図 溝状遺溝 I・II 実測図

4. II区の遺構と遺物

(1) 表土および暗褐色土層

表土は厚さ20cm前後で、以下暗褐色土層30cm前後をへて黄褐色土層へ移行するが、G16～18では深さ1m以上に達する攪乱を受け、F16・17の一部にも及んでいる。

遺物の出土量はE21・F21・22においてはかなり多いが、E13～15付近ではごく少量であった。

表土および暗褐色土層の土器破片には、花積下層式、勝坂式、阿玉台式、加曾利EⅡ式、加曾利EⅢ式、宮の台式、弥生町式および五領式の諸型式が認められたが、阿玉台式、宮の台式および弥生町式は数片にすぎず、また各型式の出土量も地点によって相違がある。以上のうち、花積下層式土器はE17～19の暗褐色土層下部から、この部分の黄褐色土層中に存在する黒色土の落込みの上端にかけて、かなり集中的に出土している。したがって、この落込が同期の住居址である可能性が多いのであるが、確認するまでに至らなかった。

7号住居址にかかるE20～22およびF21付近では、各期の土器に混って、五領式土器が暗褐色土層中から多量に出土した。7号住居址の場合は、床面が黄褐色土層上面から20cmの比較的浅い位置にあるため、耕作による攪乱を相当に受けており、暗褐色土層と住居址覆土との明確な区分は困難な状態であった。したがって、この部分においては、資料が幾分混乱した疑いがある。

次に、E15では、2号住居址の南側に加曾加EⅡ式の鉢形土器1個(第17図3)が、黄褐色土層直上から横倒しの状態で単独出土した。しかし、周囲には遺構と考えられるものは全く認められなかった。

土器以外の出土品としては、表土から石鏃1、槍形石器1(図版7下、上列右端)、小型磨製石斧1(図版7上)が、暗褐色土層中からは石鏃2、打製石斧2、石製模造品3、土錘6等が出土している。

(2) 2号住居址

住居址(第11図)

E16・17にかかった小型の竪穴住居址で、床は黄褐色土層を約15cm掘込んでいる。発掘部分における幅は3.5mで、周溝はなく、柱穴もこの部分では認められなかった。炉は底に直径

2～3cmの小石を敷いたもので、58cm×70cmの規模をもっている。なお、床面の東北隅に1m×1.5m、深さ床面下30cmの小ピットがあるが、その性質は明らかでない。

本住居址は、調査上の都合で完全に発掘できなかったが、床面の一部は溝状遺構Iによって切られ、また東南側は、F16・17のごく一部を除いて、攪乱により破壊されている。

時期については、床面から宮の台式土器が、少数ではあるが検出されているので、宮の台期に属するものと考えられる。

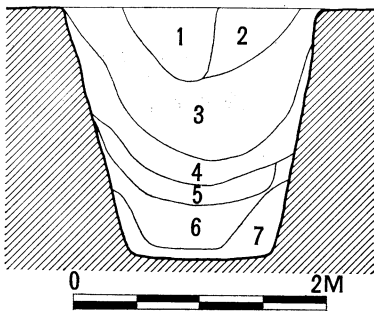
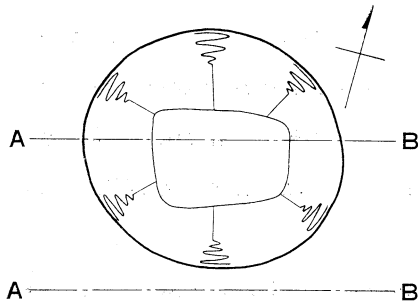
床面および覆土中の遺物

遺物はきわめて少なく、床面上に宮の台式土器の破片数個、小ピットの覆土中に宮の台式および花積花層式土器の破片が発見されたにすぎない。

(3) 7号住居址

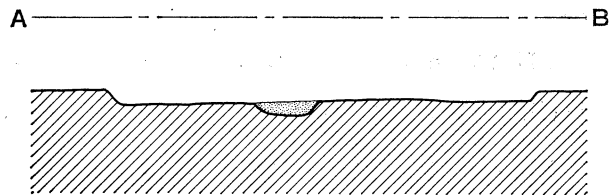
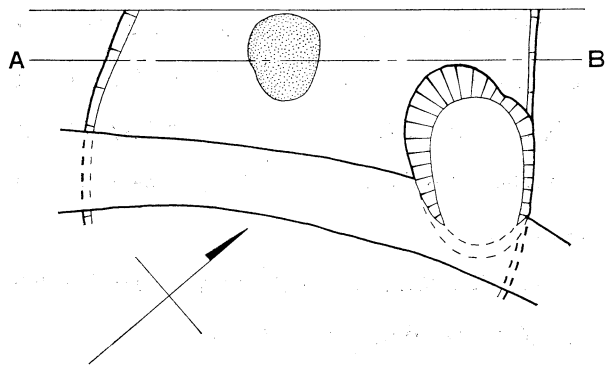
住居址

本住居址は耕作その他による破壊が激しく、規模の把握が困難であるため、発掘を中止した。床面は黄褐色土層上面から約20cmの深さにあるが、E19付近から続くと思われる黒色土の



第10図 土壌実測図

- 1. 攪乱層 2. 暗褐色土層 3. 暗褐色土 4. 関東ローム土を含む暗褐色土
- 5. 暗褐色土 6. 関東ローム土を含む暗褐色土 7. 暗褐色土



第11図 2号住居址実測図

落込の上面に設けられているため、きわめて軟弱であり、D21、E20・21にその一部が認められたにすぎなかった。壁もD21に残存したのみである。E20・21において、 $30 \times 30\text{cm}$ の範囲にごく薄い焼土が各1個存在した以外には、柱穴や周構その他は認められなかった。

床面および覆土中の遺物（第17図4～6）

床面から発見された土器は、すべて五領式土器に属する破片で、壺形、甕形、高环形、坏形および器台形等の器形がある。床面の残存部分は、ほとんど攪乱を受けていないので、これらの土器から、本住居址は五領期に属すると考えられる

覆土中からは、勝坂式、加曾利EⅡ式、五領式その他の土器破片が出土したが、五領式土器が大部分で、その他は少数が混在した程度であった。

覆土中出土の特記すべき遺物は石製模造品3点で、器形は剣1(4)、鏡2(5～6)がある。いずれも滑石製である。剣は全面よく整形が行われているが、鏡は周囲を粗く磨いただけの粗雑なもので、穿孔は(5)が1個、(4)が2個となっている。なお、穿孔は剣では片側から、鏡の場合は両側から行われており、穿孔し直した痕跡がみられる。

5. Ⅲ区の遺構と遺物

(1) 表土及び暗褐色土層

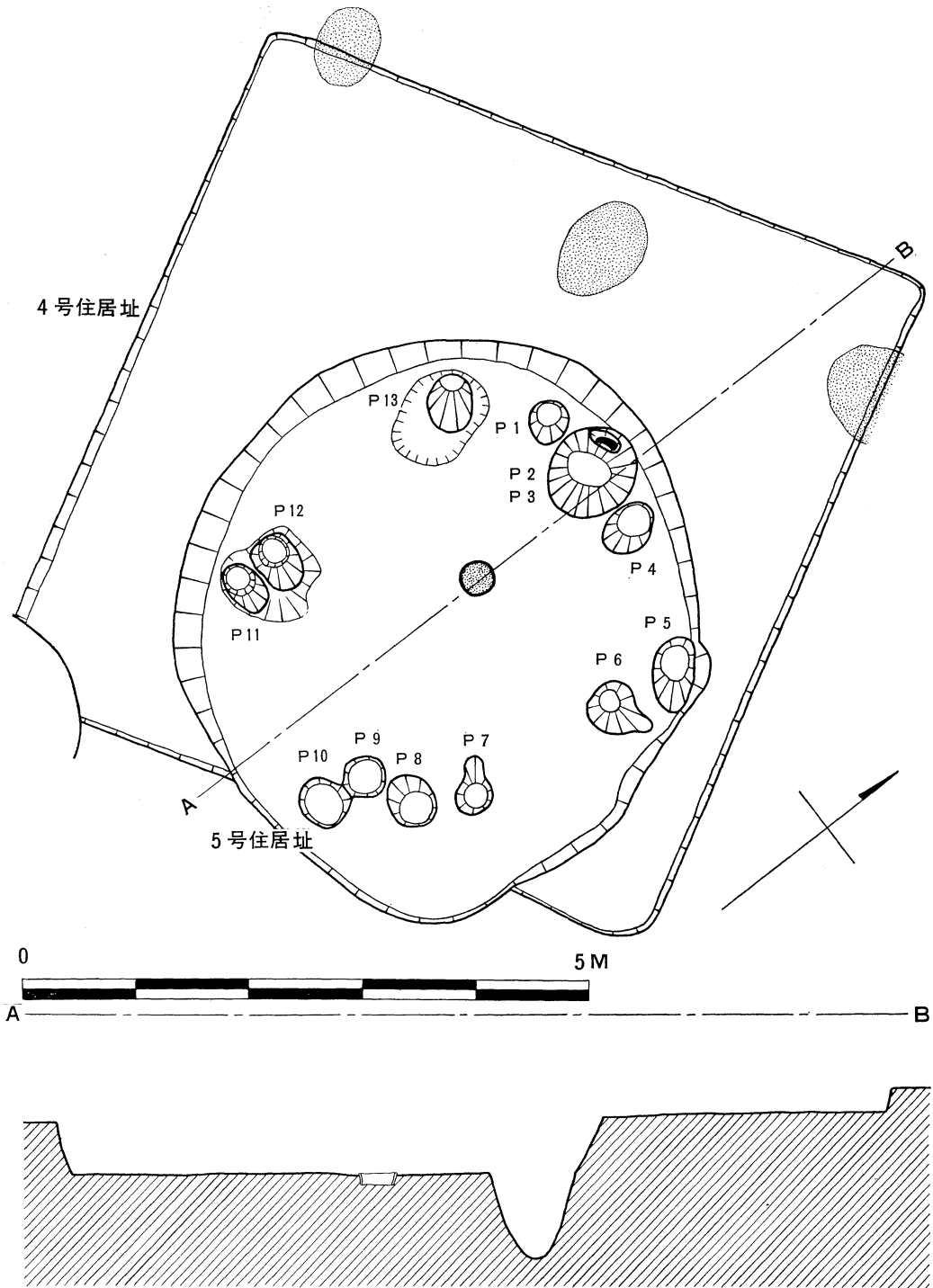
Ⅲ区は台地縁辺に近いので、表土および暗褐色土層の堆積は一般に薄く、平均して表土20cm、暗褐色土層10cm前後である。

表土および暗褐色土層中からは、花積下層式、諸磯b式？、阿玉台式、勝坂式、加曾利EⅠ式、加曾利EⅡ式、加曾利EⅢ式、称名寺式、弥生町式および五領式の各型式の土器破片が出土した。加曾利EⅡ式土器が6号住居址付近のA3、B3・4に、五領式土器が4号住居址北半部にかかるB4～7、C3～7の暗褐色土層中に多く存在した以外は、層による型式差や特別な出土状態は認められなかった。前述の諸型式のうち、花積下層式、称名寺式および弥生町式土器は、各数片の出土をみたにすぎない。

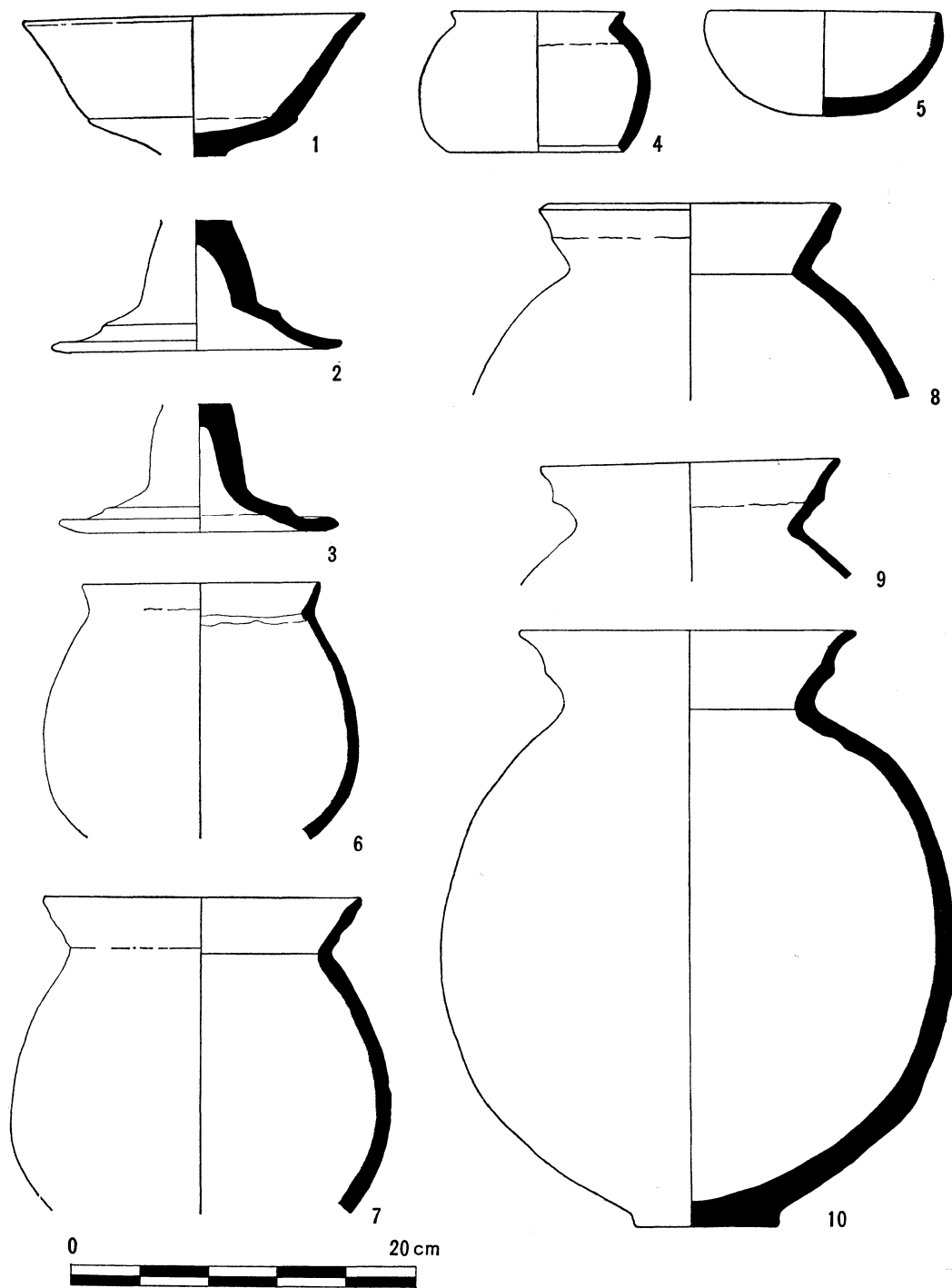
土器破片以外の遺物には、表土から土錘1が、暗褐色土層中から石鏃1、打製石斧3、土錘3の出土がある。

(4) 4号住居址

住居址（第12図、図版3）



第12图 4号·5号住居址实测图



第13图 4号住居址出土土器实测图

6.3 m × 6 m の方形プランをもった住居址である。5号住居址および土壌の一部と重複しているが、土壌との先後関係は確認できない。

床面は地表下 55cm にあって、黄褐色土層を 25cm 掘込んでおり、5号住居址との重複部分では黄褐色土層を 7cm 前後敷いた張り床となっている。周溝はなく、柱穴は床面が黄褐色土層中に存在するため軟弱であるうえ、耕作等による攪乱もあって、確認が困難であった。

西隅および東隅の壁、さらに北側の壁に近い床面の計 3 個所に焼土があり、前 2 者は特別な施設を伴っていなかったが、竈と考えられる。焼土の範囲はそれぞれ 73cm × 55cm, 85cm × 55cm (現存部分のみ), 95cm × 65cm である。

本住居址においては、北側の壁に接した東半部の床面に、広口壺形土器 2、甕形土器 2、小型の広口壺形土器の再生品 1、坏 1 および大型の土器破片数個が、ほぼ一列になって存在した。

床面および覆土中の遺物 (第 13 図・図版 11)

床面の遺物はすべて土器で、器形には広口壺形、甕形、坏形および高坏形があり、すべて五領式土器に比定できる特徴を備えている。特殊な例に、底部が欠損した小型壺形土器を再生して煮沸具(甌)として使用したものが 1 例ある (第 13 図 4・図版 11)。

壺形土器および甕形土器は、頸部が「く」字形に鋭く折れ、口辺部がわずかに屈曲して広がり、この部分に段をもつ。この「くせ」は高坏形土器の口辺と脚にもみられる。第 13 図 7～10 は北側の壁に近い部分に存在した土器である。

覆土中からは、主として五領式土器が出土したが、勝坂式、加曾利 E II 式その他の土器破片が混入している。なお、五領式土器の一部は、攪乱により床面から遊離したものと思われ、とくに下半部においては、大型の破片の出土が多かった。

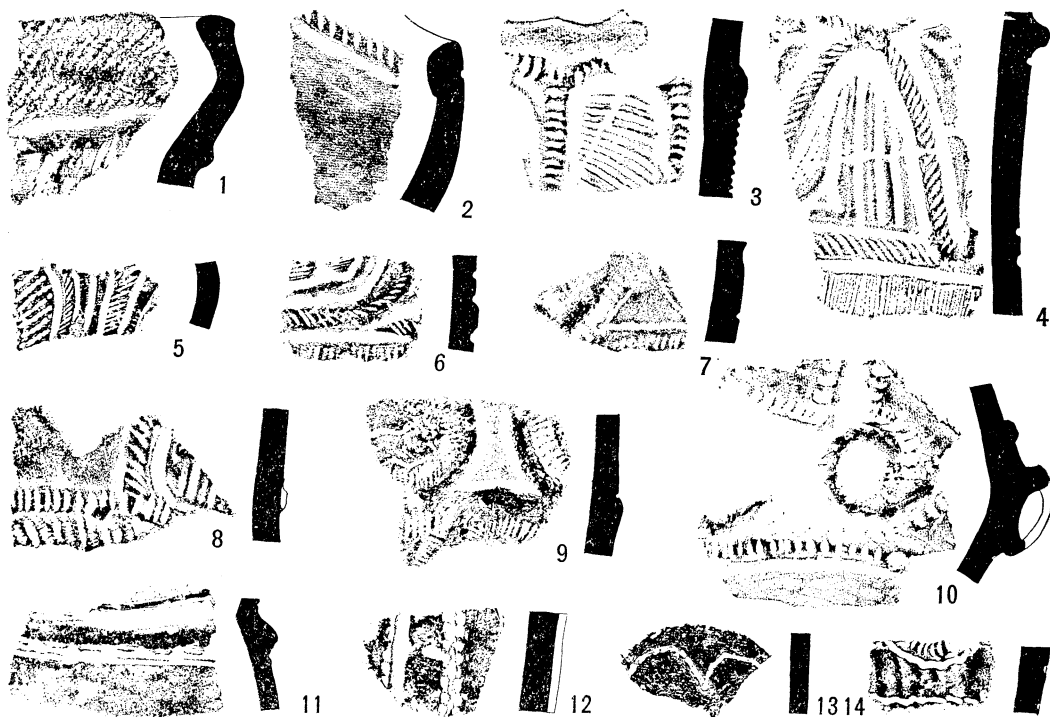
土器破片以外では、土錘 1 が出土した。

(3) 5 号 住 居 址

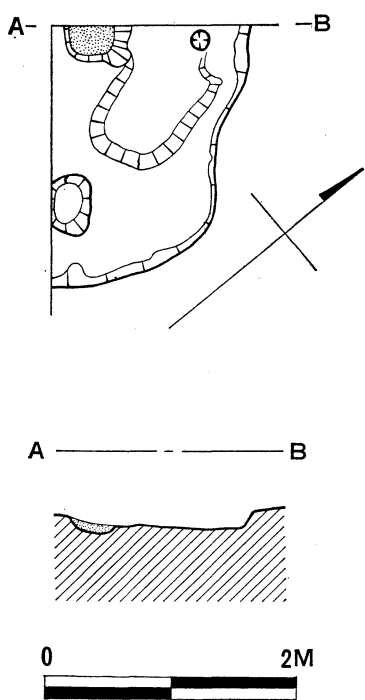
住居址 (第 12 図, 図版 4)

5.65 m × 4.75 m の規模をもつ竪穴住居址で、プランは、ほぼ円形である。

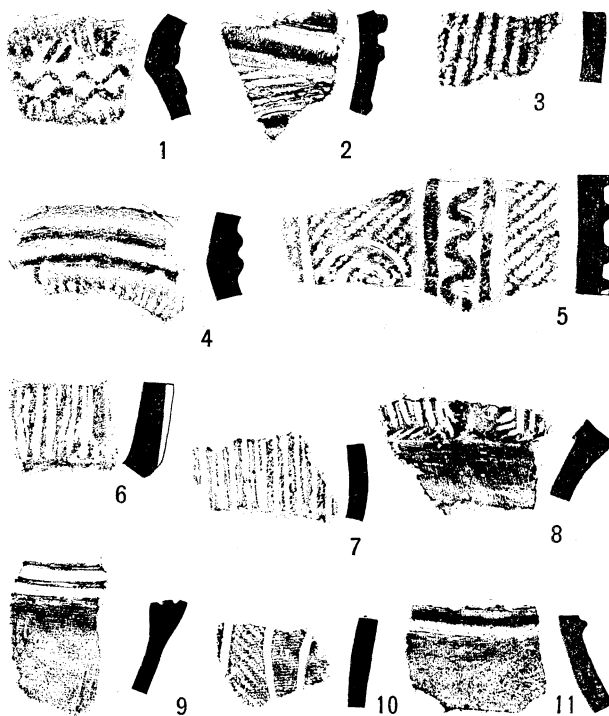
床面の深さは地表下 1.05 m で関東ローム層を 50cm 掘込んでいる。13 個の柱穴があるが大体 2 個づつ組になっており、新旧がある。切合関係から確認できる新柱穴は P2, P10 および P12 で、これに対応する旧柱穴は P3, P9 および P11 が挙げられる。したがって、本住居址は改築が行われたことが知られ、同時期の柱穴は 6 個前後と考えられる。柱穴の深さは浅いもので



第14图 5号住居址出土土器(約形)



第15图 6号住居址实测图



第16图 6号住居址出土土器(約形)

20cm前後、深いもので90cm前後であって、内側に10～20°傾斜している。P2とP8においては、柱穴の下部に柱止めを行っており、P2では20cm×20cm×5cmの石塊が、またP8の場合は大型の土器破片が埋込まれていた。

炉は1個で、床面中央より幾分か北に寄って設けられ、直径約30cmの鉢形土器（勝坂式土器）を埋設した埋壙炉である。土器の器面は焚火による損壊は認められず、焼土もごく僅かである。

床面および覆土中の遺物（第14図、図版9）

床面からは勝坂式土器約30片と阿玉台式土器4片が出土した。第14図1～10は勝坂式土器であるが、出土土器中には隆起線に沿ってみられる特徴的な爪形の押引文をもつものは少ない。11～14は阿玉台式土器で、胎土中に多量の雲母を含んでいる。

図版9に示した蛇頭を象った把手は、炉の東20cmの床面から出土した。現存部分の高さ12cm、両眼が大きく表現され、口の部分の先端に穴がある。この蛇形把手は、勝坂式土器に普通にみられるものと比較して、全体の形状が異なり、部分の表現においても差が少なくない。

石器は柱穴P10に接して磨石1（図版7下・下列左端）が出土した。

覆土中からは勝坂式土器の破片が多く出土し、阿玉台式および加曾利EⅡ式等の土器破片が多少混在した。ほかに、土器破片を利用した土錘1が出土している。

（4） 6 号 住 居 址

住居址（第15図）

A3・B3に現れた堅穴住居址で、大部分が宅地にかかるため、調査を打ち切った。

プランは円形のように思われるが、壁の形状は不整である。床面は黄褐色土層を掘込んで設けられ、地表からの深さは45cm、壁の高さは約15cmをはかる。東側の壁に接した床面に75cm×120cm、深さ15cmの浅い凹所がある。柱穴は2個認められた。炉は西北側断面に一部分が現れ、発掘部分における最大幅は45cmをはかる。床面を10cm掘り凹めて設けられたもので、焼土が充満していた。

本住居址は、床面から加曾利EⅡ式土器の破片が出土しているため、同期に属するものと考えられる。

床面および覆土中の遺物（第16図）

床面の土器は、いずれも小破片であるが、加曾利EⅡ式に属するものである（4～7）。

覆土中からは、勝坂式、加曾利EⅠ式（1・9）、称名寺式？の土器破片も出土している

が、加曾利式土器が大部分である。

(5) 土 壙

土壙（第11図，図版6下）

竪穴状の特殊な遺構である。黄褐色土層および関東ローム層を掘込んでおり，地表から壙底までの深さは2.45mで，底に行くに従ってすぼまっている。プランは土壙上端においては円形で，1.85m×2mの規模をもっているが，壙底では1.1m×0.87mの隅丸長方形となり，第11図に示したように，東側の方が幾分幅が狭い。壁面は底まで，ほとんど直斜している。

土壙の覆土は6層に区分することができる。第1層は表土下の暗褐色土層が深く落込んだもので，一部に攪乱がある。第2層はやや黒味を帯びた暗褐色土，以下第3層・直径2cm前後の関東ローム土の小塊を含む軟質の暗褐色土，第4層・暗褐色土，第5層・関東ローム土の小塊を含む暗褐色土，第6層・暗褐色土となっている。

各土層の堆積状態は自然で，人為的なところは認められなかった。

本遺構は，形状からみて特殊な施設と考えられるが，その性質ならびに時期については不明である。

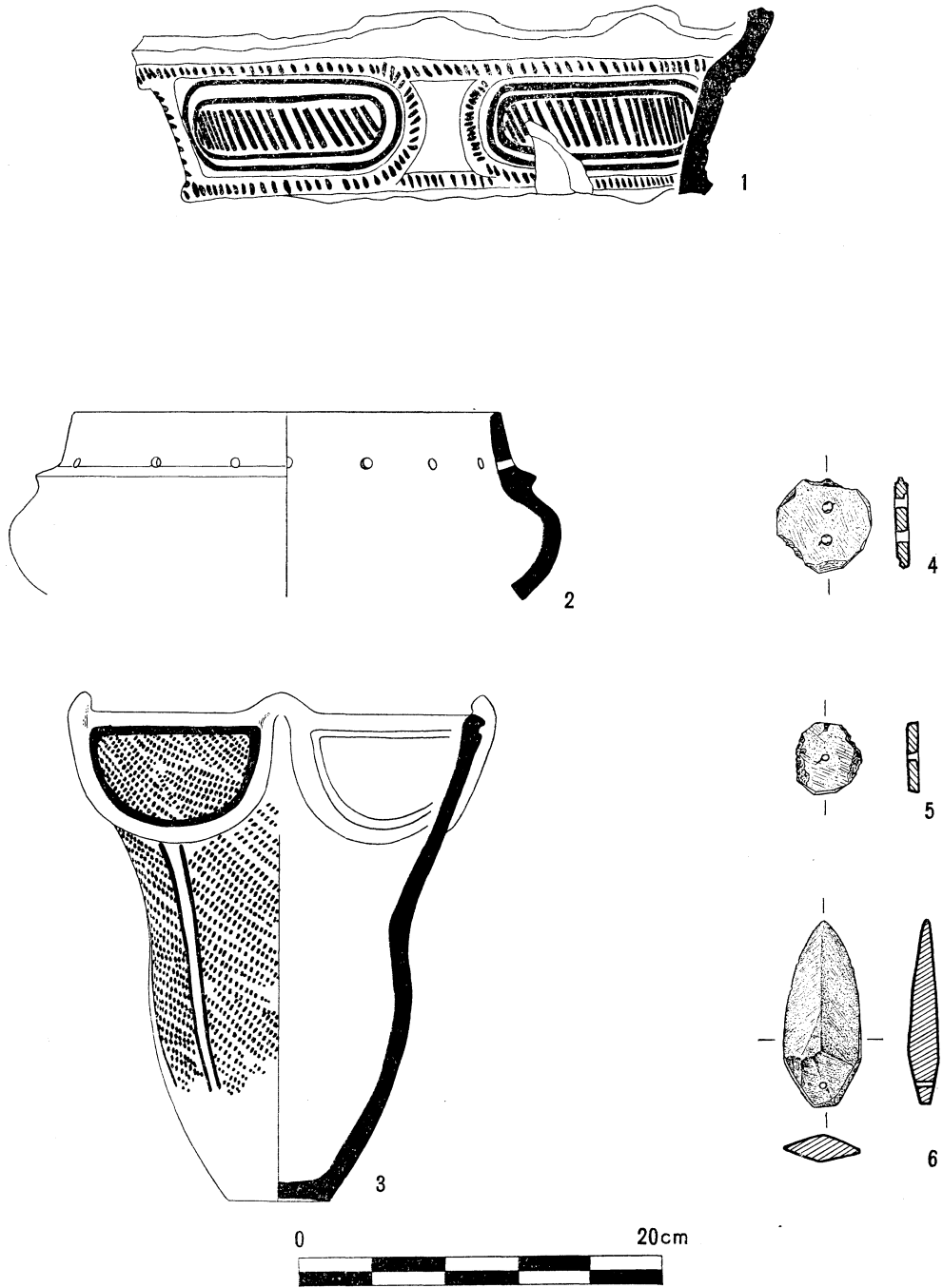
遺 物

土壙底部には遺物は全く存在しなかった。覆土においては，第1層から勝坂式，加曾利EⅡ式，五領式の土器破片少数が，第2層から弥生町式壺型土器の大型破片と前野町式土器と思われる鉢形土器の破片数個，第5層から型式不明の縄文式土器および土師器の破片と土錘1が出土したが，いずれも混入の状態であって，本遺構との関係は認められない。

6. 結 び

第1次調査の結果，梶山遺跡は縄文，弥生および古墳の3時代にまたがる遺跡であることが確認された。遺跡の主体は台地上面および東南側緩斜面に存在する集落址であるが，古墳時代のなかば以降，低地へ移るようであり，台地上面の小円墳や斜面の横穴墳墓群の存在も，それを示すものであろう。

縄文時代については，発掘地点付近から尖底土器の破片が出土したことが知られているけれども，今回の調査では早期の遺物は発見されなかった。前期の遺物では，花積下層式土器が比較的目立った存在を示し，とくにE 16～19付近に集中する傾向がある。斜面の小貝塚（梶山



第17图 出土遺物実測図 1~3 土器, 4~6 石製模造品

貝塚)は花積下層式土器を出土するとも言われているので、それらの存在を注意する必要があるが、第3次調査の重点のひとつに予定している。中期の遺構および遺物は前に述べたとおりであるが、土器破片を用いた土錘については、その大部分が加曾利E I式土器または加曾利E II式土器の特徴をもつものである点が注目される。後期の遺物は称名寺式および堀の内I式に属する土器破片が出土した。しかし、全体としてはきわめて僅かであり、それらに関する遺構も認められなかった。

弥生時代の遺構で注目されるのは溝状遺構Iである。いわゆるV字溝と比較すると断面の規模がちいさく、形状もやや異なっている。とくに底面および斜面における小穴の存在は注意すべきもので、棚のような施設の痕跡と考えられ、したがって集落に付随する一種の防護設備である可能性が大きい。一方の溝状遺構IIには、そのような設備が伴った形跡はみられない。けれども、その規模をみると特別な設備を付加しなくても十分に防護の機能を果し得るものと思われる。したがって、柵を伴うことにより、溝自体の幅と深さが減じた可能性もあるところから、一般にV字溝と呼ばれるものよりも後出すると考えてよいかも知れない。しかし、本例の存在をもって、V字溝のすべてを防護設備と見なすのは適当でないであろう。

古墳時代については、発掘した住居址はいずれも五領式土器の新しい部分(五領II式)を伴っているが、4号住居址では、すでに竈と思われる構造がみられ、3号住居址よりも幾分新しいようである。

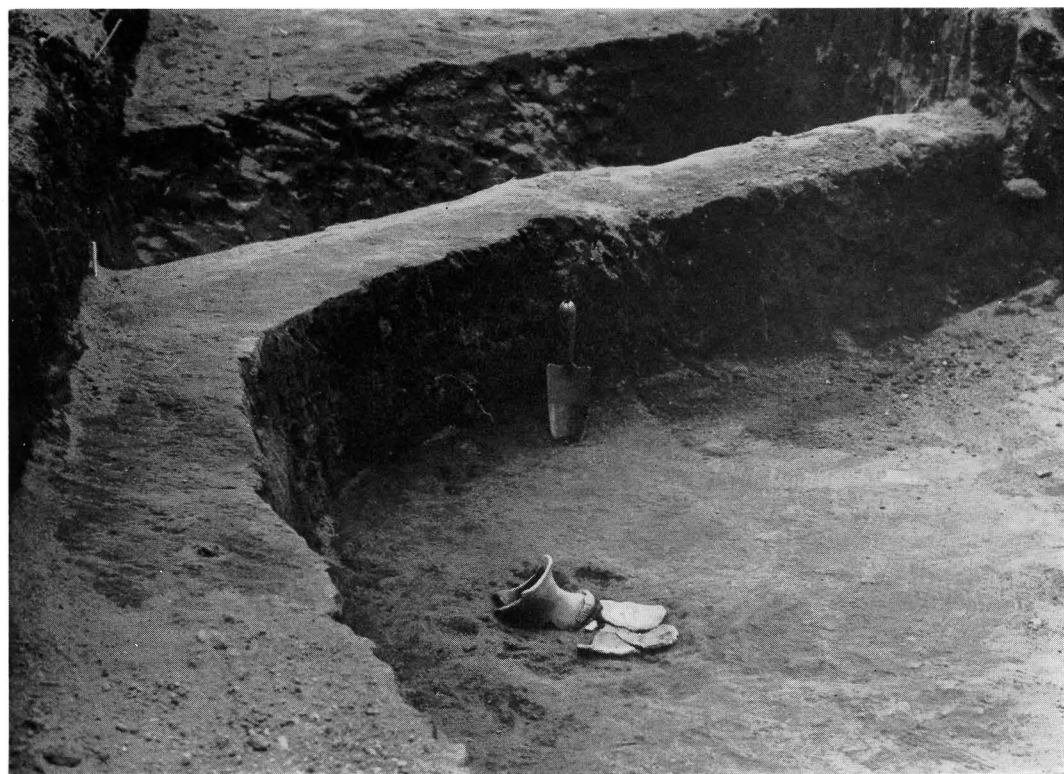
また、E 21からは石製模造品の出土をみたが、それらが7号住居址内に存在したか否かは明らかではない。形態的には古い様式をそなえており、他遺跡の出土例から推定して、五領期に属すると考えてよいと思われる。

4号住居址の南側に存在する土壌は、時期と性質は全く不明である。これと似た遺構は最近、二三報告されているが、いずれも時期と性質は明らかでない。ただ、本遺構の壁面は非常によく整えられており、鉄製器具の使用が考えられ、少なくとも弥生時代後期——おそらくは古墳時代——以後に設けられたものと思われる。

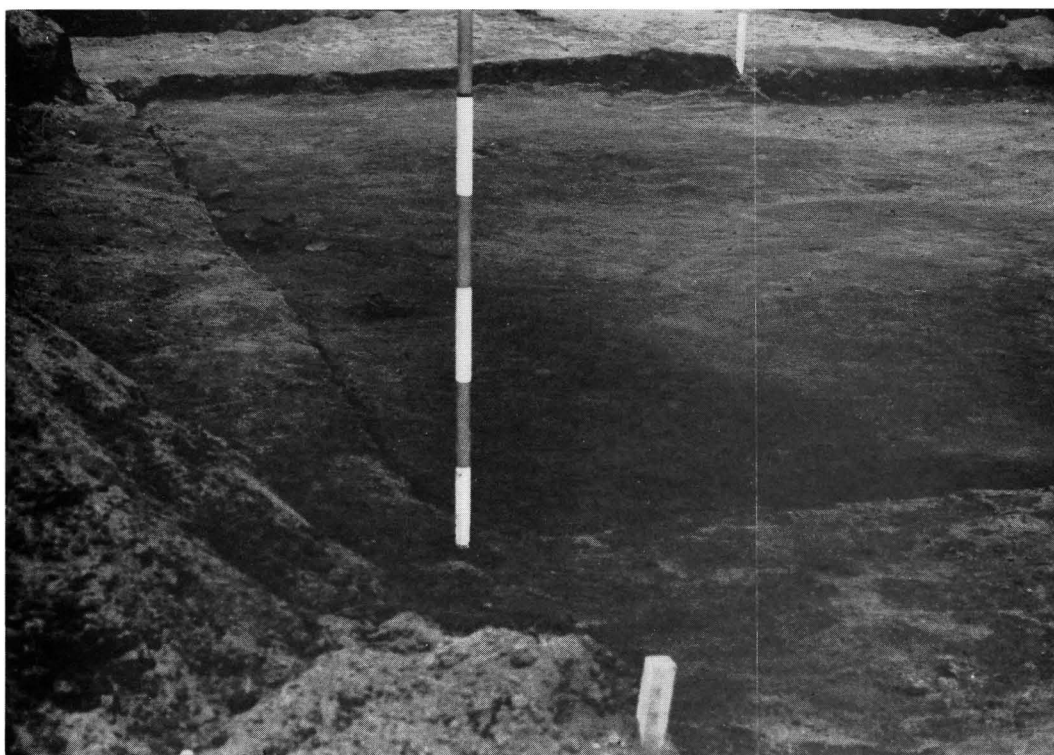
今回の調査は天候に恵まれず、加えて期間的制約により、未処理の部分が少なからずある。これについては第2次および第3次調査のさい補う予定である。



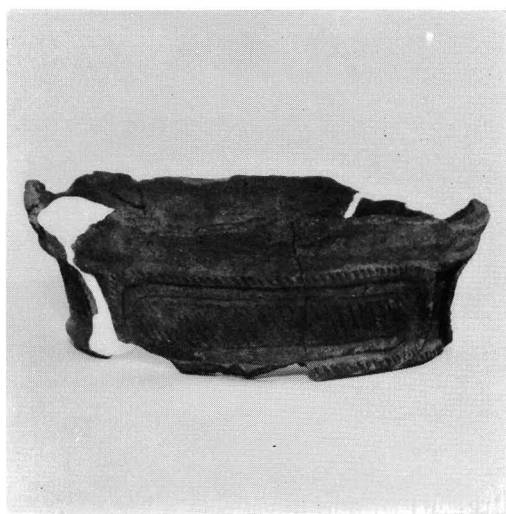
遺跡遠景 / 発掘遺構の一部



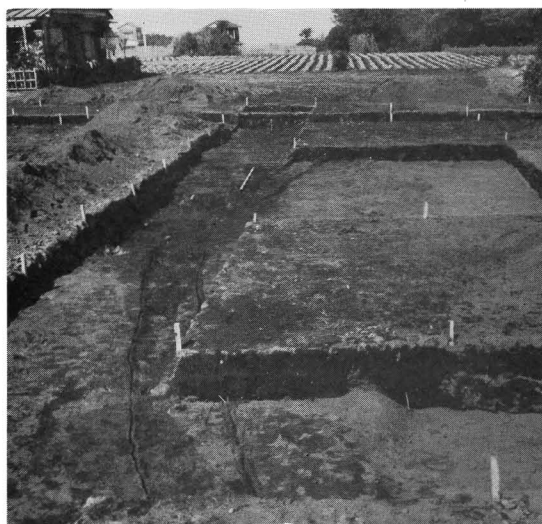
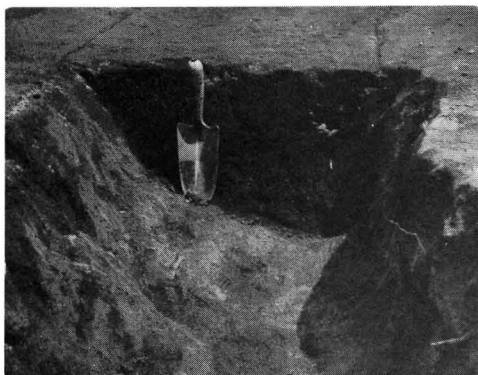
1号・3号住居址 / 3号住居址土器出土状態



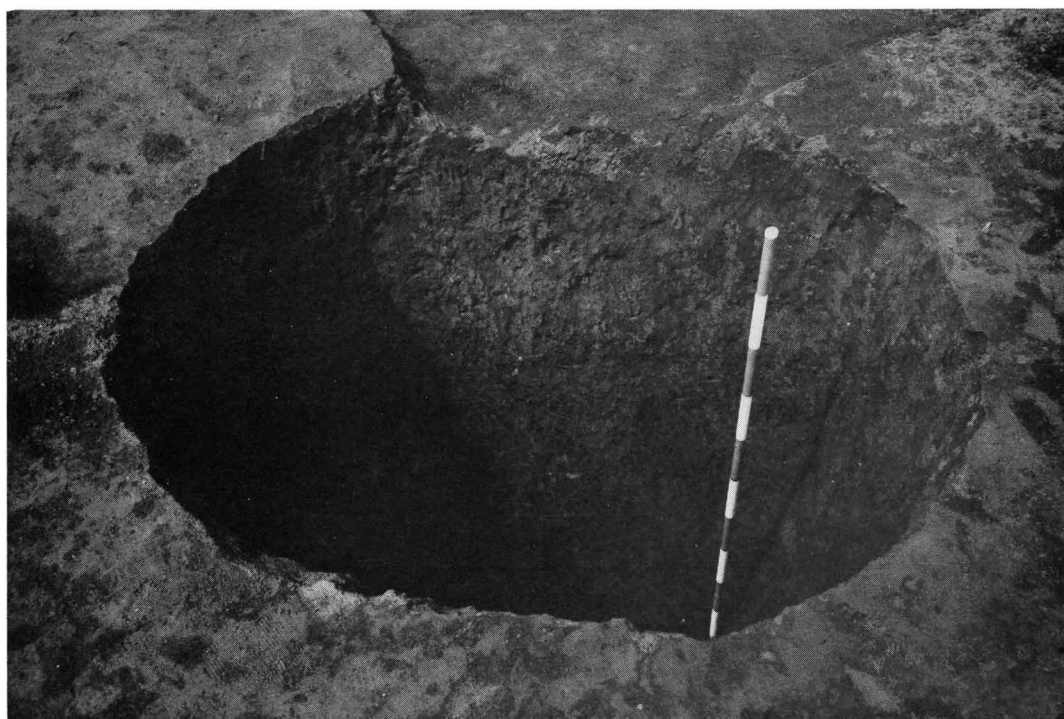
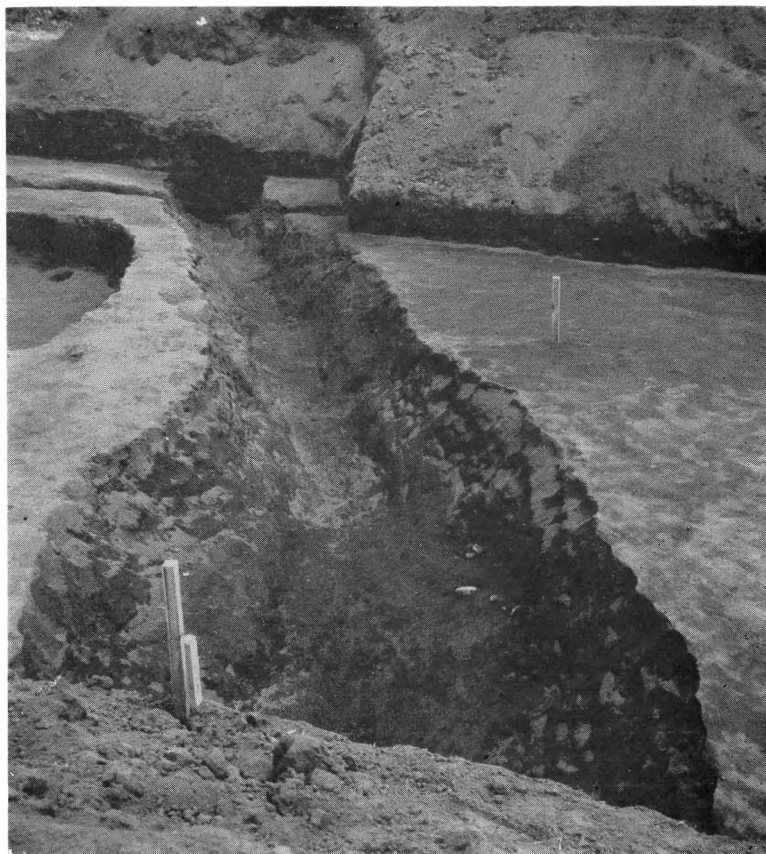
4号住居址 / 4号住居址土器出土状態



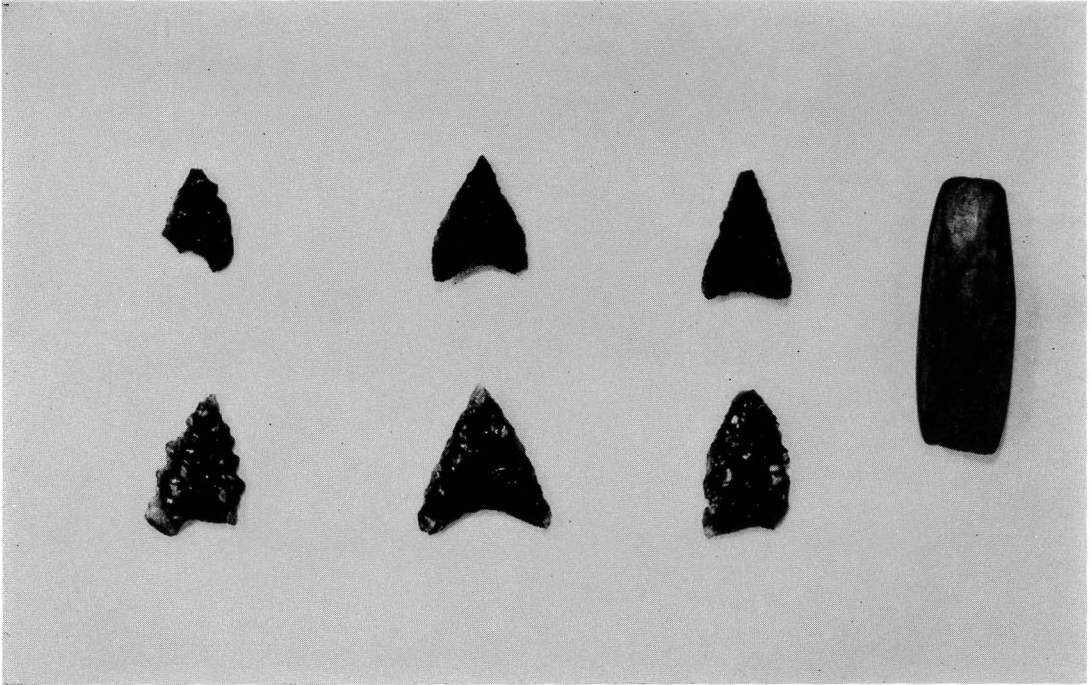
5号住居址 / 埋甕炉および使用土器



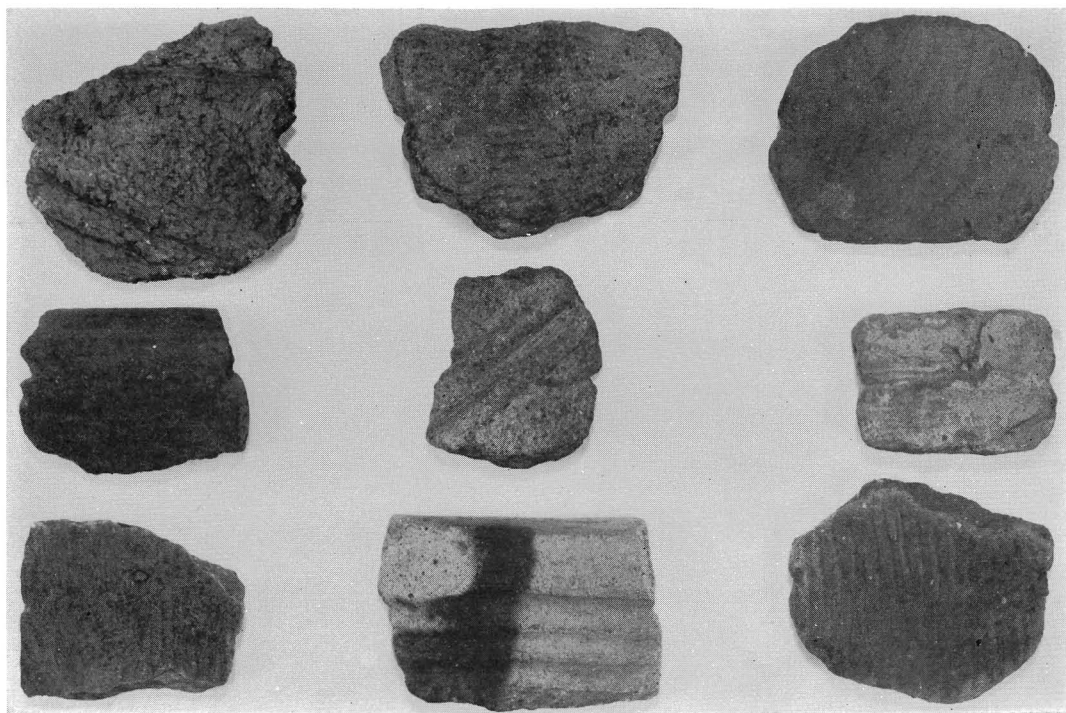
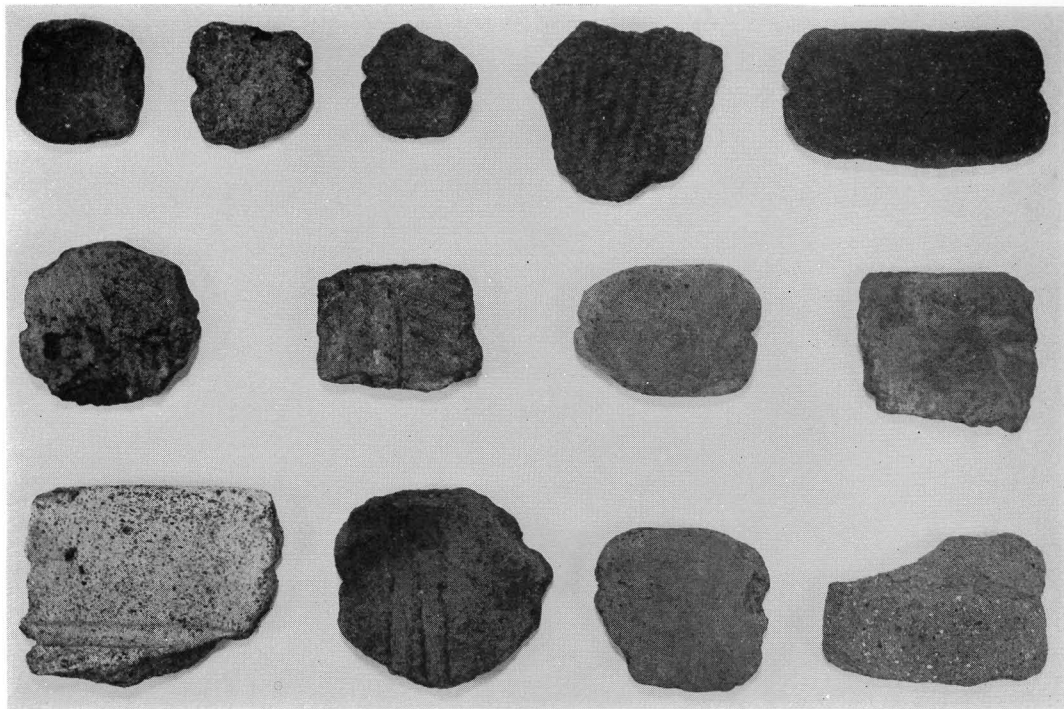
溝状遺構 I 発掘部分 / 遺構断面 / 発掘前の状態



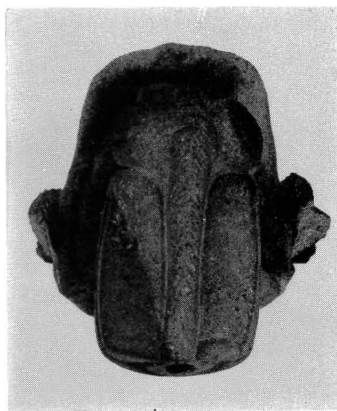
溝状遺構Ⅱ発掘部分 / 土壙



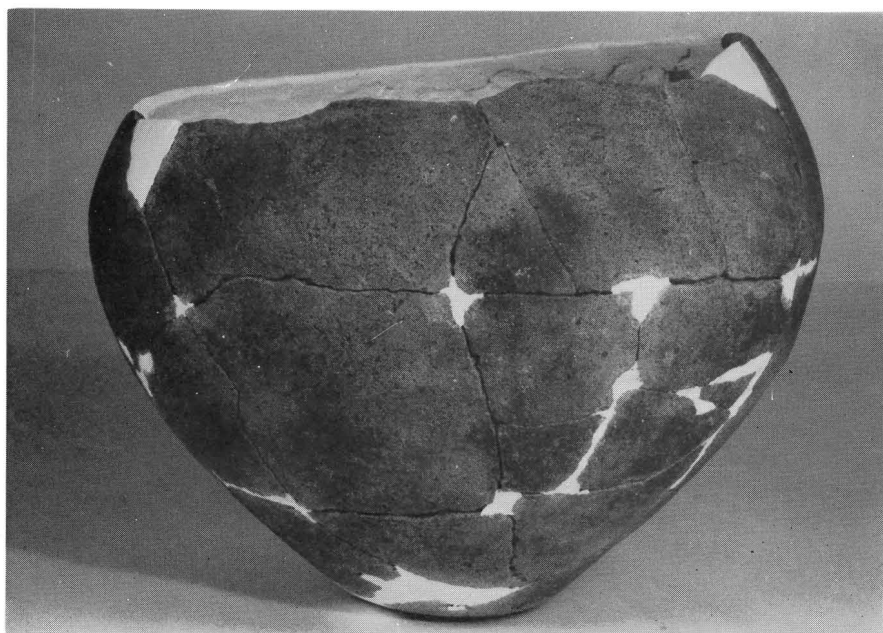
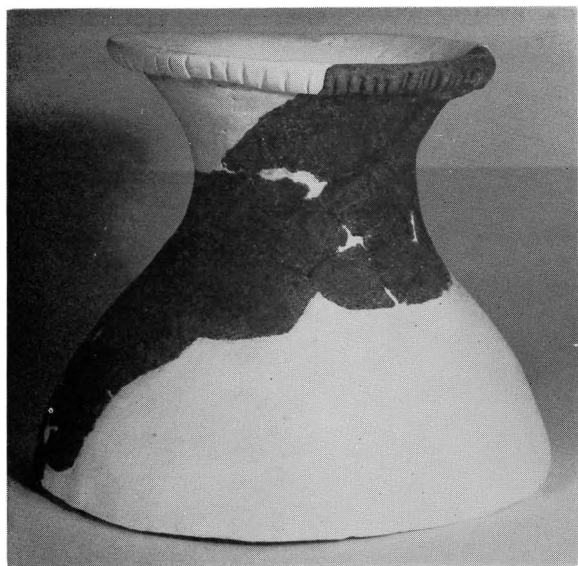
各区出土石器



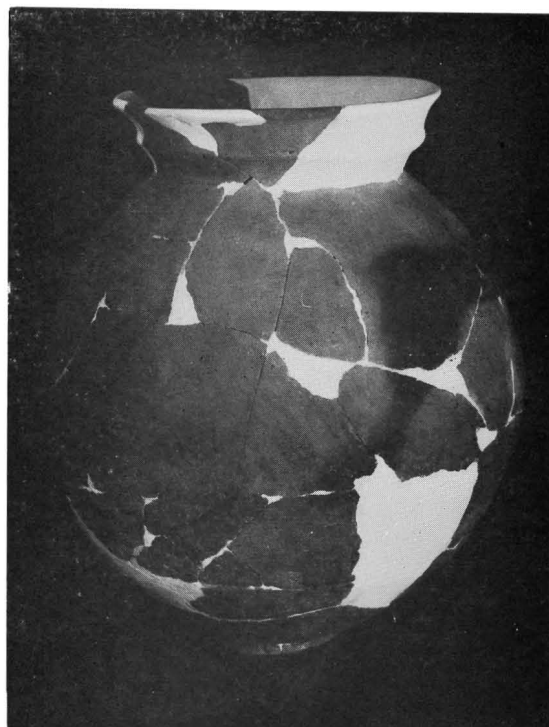
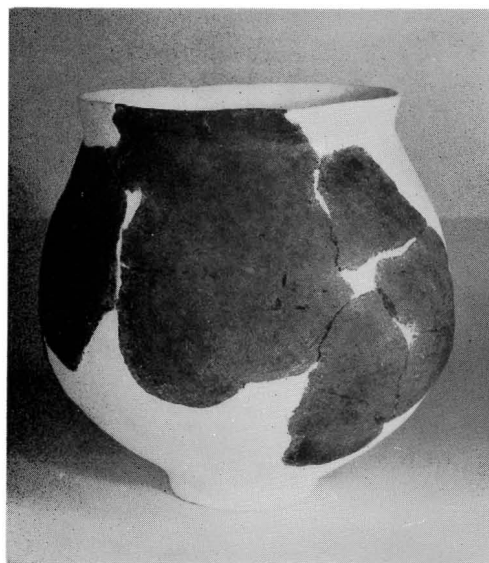
各区出土土锤



5号住居址出土蛇頭把手



1号住居址出土土器



4号住居址出土土器

昭和43年3月25日印刷
昭和43年3月31日発行

編集兼発行者
神奈川県立博物館

村田良策
横浜市中区南仲通5の60

印刷所(有)白秀堂印刷